

特集

追悼：横尾武夫さん

定金晃三（元大阪教育大学）

大阪教育大学名誉教授の横尾武夫さんが、去る2022年9月14日に逝去されました。横尾さんは1938年大阪でお生まれになり、京都大学大学院理学研究科を修了された後、昭和40年（1965年）に大阪教育大学（当時は大阪学芸大学）に奉職されました。以後約40年間同大学で教鞭をとられ、平成16年（2004年）にご退職になりました。その間天文学の教育・普及に尽力され、1998年7月から2002年6月までの期間には天文教育普及研究会（当時）の会長を務められました。

私は昭和50年（1975年）に幸運にも大阪教育大学に職を得ることが出来、天王寺キャンパスに有った天文学研究室へ通うようになりました。以来彼のお世話になること30年近くに渡りました。この度のご逝去の報に接し大変寂しく感じています。以下に追悼の意を込めて横尾さんとの思い出を書こうと思います。

私と横尾さんとの出会いは、1968年に彼がふらりと京都大学理学部宇宙物理学教室にあった学部学生の控室へ来られた時でした。その時の用件は、彼が近く東京天文台岡山天体物理観測所にある188cm望遠鏡で観測をしに行くが、だれか手伝いに来てくれないか？ということでした。私はその場で手を挙げ、そのチャンスを得て始めてあの巨大望遠鏡の観測室に入り、夜間の観測を体験することが出来ました。その時の観測は、ニュートン焦点にあるカメラを使って、近傍の銀河の直接写真を撮るといったものでした。望遠鏡ドームに付いているアーム付きのゴンドラに乗って、カメラ部の操作を夜間に空中でやることを体験出来ました。ところが、その時はあいにく天気の良い夜がなく、満足の行くデータを得

ることは出来なかったと記憶しています。

その後私は大学院へ進学し、恒星の分光観測を専門とするようになりました。その頃は大学院卒業後の研究・教育職への道が非常に厳しく、私も（その頃の言葉で）オーバードクターODを覚悟せねばならない状況でした。ところが、D2の年の夏ごろに大阪教育大学から天文の助手の公募があり、ダメ元と思って応募しました。応募者は結構あったようですが、単名の論文をPASJに出版している候補は一人だけだったとかで、幸運にも採用が決まりました。おかげで、ODの経験をしなくて済んだ珍しいケースと言われました。

さて、1975年春に天王寺校舎にあった研究室に赴任してみると、部屋そのものは旧大阪師範学校の教室だったとかで、古びて汚いところでしたが、別室には新設されたばかりのマイクロフォトメーターという測定機械が鎮座していました。与えられた最初の仕事はその機械を調整して、まともなデータが出るように動かす試験をすることでした。岡山天体物理観測所の188cm望遠鏡クーデ分光器で観測したスペクトル乾板を使って、測定結果の検討を繰り返したことを記憶しています。横尾さんはその機械で銀河の撮像をした乾板の測定をやられていました。

私の赴任当時、大学の教授会は柏原市への移転統合をめぐって大混乱を起こしていました。3か所（天王寺、平野、池田）に分散していた施設を一か所に集約し、新しい教育大学を創るという構想ですが、なにしろ移転先が柏原市の山の中、近鉄の駅は出来るがそこからは歩き以外の交通は無いということで、反対論が沸騰していました。ところが、文部省（当時）はすでに予算を執行したことにな

っているので、ぐずぐずしていたら会計検査院に叱られたということがあって、移転統合が強行されることになりました。その移転は1991年から数年掛けて行われましたが、その時が横尾さんにとって千載一遇のチャンスだったのです。

大阪の街のど真ん中にある天王寺地区は夜空が非常に明るく、とても天文観測ができるような状態ではありません。一方、柏原市の山の中は、北西方向に大阪市街が有ってやや明るいものの、東や南の方向は結構夜空が暗い状態が保たれています。そこで、新設した校舎建物の屋上に本格的な天体観測ができる施設を作ろうという計画が横尾さんを中心として動き始めました。まず、理科の先生方に計画を説明し、賛同を得てから事務方や大学の執行部を説得するなど予算獲得のための運動をします。徐々に具体化してくると、ドームや望遠鏡の設計に入ります。その計画を元に望遠鏡などの入札を行います。数社の望遠鏡メーカーが参加しましたが、こちらの要求を満たす会社に落札と決まった時には、研究室で横尾さんを中心として万歳を叫びました。



図1 大阪教育大学 51cm 望遠鏡

こうして1993年度の予算に口径51cmの反射望遠鏡と高性能のCCDカメラが組み込まれました。望遠鏡の製作中にも横尾さんは頻繁にメーカーと連絡を取っていました。

その望遠鏡が1994年3月に搬入され、組み立て・調整が終わって試験観測を始めた矢先のことでした。子持ち銀河として有名なメシエ51 (M51) に明るい超新星が4月2日に発見されたのです。望遠鏡の完成祝いの観測にこれはちょうど良いとばかりに4月5日から、暗くなって見えなくなった5月30日まで晴れば必ず学生諸君と一緒に観測をして、結局23夜分のV, R, I 3バンドの見事な光度曲線を描くことが出来ました。発見後の観測開始が早かったので、極大に至る変化も見事に捉えられています。そこで早速論文を書いて日本天文学会の欧文研究報告 (PASJ) に発表しました。

Yokoo, T. et al. 1994, PASJ, 46, L191.

これは記念すべき第1号の論文です。



図2 51cm 望遠鏡で撮影した M51

以来30年ほどの間に、国内外の天文台との共同観測にも積極的に参加し、それらの成果をまとめた論文は総数80件に上ろうとしています。口径50cm程度の小型望遠鏡でこれほどの科学的な成果を挙げた例は国内では聞いたことがありません。それというのも、使いやすく故障しにくい望遠鏡の設計・製作に力を尽くされた横尾さんのご功績が大きいと思います。また、観測装置を高性能CCDカメラ1台に絞ったこと、時間的に明るさが

変動する天体（激変星と活動銀河核など）の観測に集中した運用方針の結果でもあります。そういう意味でこの望遠鏡には” T. Yokoo Telescope”という銘板を付けたらどうかという気もしています。それやこれやで柏原の地で大阪教育大学の観測天文学は大きく発展しました。柏原移転で一番得をしたのは我々だということも出来るかと思っています。

横尾さんの関心の幅広さを反映して、卒業者の中には科学史分野とか望遠鏡の製作者として活躍している人もあります。これらについては別項で紹介があると思います。

あれこれ書きましたが、横尾さんの残された遺産は各地で大きく育っています。そのことを報告して、横尾さんのご冥福をお祈りしたいと思います。

* * * * *